

レオン・バッティスタ・アルベルティ『家族論』と 文人の公益性——誰に向けて書くのか

横田 太郎

はじめに

レオン・バッティスタ・アルベルティ (Leon Battista Alberti, 1404-1472) は、既存の学問観および文人観を様々な切り口から分析し疑問を投げかけている。なかでも彼の思想を特徴づけるのが、『家族論』(*Libri della famiglia*, 1433-1434, 1435?, 1436-1437?) から『家父長について』(*De ierarhia*, 1465) に至るまで随所に観察されている、学識の実用性を重んじる姿勢である¹⁾。しかし、この姿勢をいかにしてアルベルティが獲得したのかについては、いまだ研究が深められているとは言い難い。そこで、本稿では彼の処女作である戯曲『フィロドクスス』(*Philodoxeos fabula*, 1424)、学問および文人論である『文芸の利益と不利益』(*De commodis litterarum atque incommodis*, 1428-1432?) (以下、『文芸』と略記)、また、1430年代を中心に執筆された小作品がまとめられた『食間対話集』(*Intercenales*) を経由して、『家族論』執筆の際の言語の選択と、同作品における学識の取り扱われ方に焦点を当て、アルベルティの学問観と文人観を追っていく。

本稿では、彼が文人と社会との関係を模索し続けていたことを念頭に置き、「文人の公益性」に注目する。この意識は、いわゆる「市民的人文主義」(civic humanism) の旗手であったレオナルド・ブルーニ (Leonardo Bruni, 1370-1444) の思想に顕著に観察される。そこで以下では、まず、文人の公益性をめぐるブルーニの姿勢を整理し、続いて、アルベルティが上記の諸作

品においてこの問題とどのように向き合っているのかを検討する。こうした確認により、『家族論』執筆におけるアルベルティの姿勢が明確になると同時に、その姿勢が一貫した問題意識に基づくことが示されるであろう²⁾。

1. ブルーニが示す公益性

ハンス・バロンがブルーニの思想に読んだ「市民的人文主義」は、現在ではおおむね、「イタリア・ルネサンス期における文人が、行動的生の諸相にかかわる古典の教えを雄弁に伝える姿勢」を示す表現として用いられている³⁾。つまり、人文主義者は学識を通じて自覚的に社会とかかわっていたのであり、ブルーニも「人文学」(studia humanitatis)を武器として、社会的成功を収めている⁴⁾。

この図式は、たとえばブルーニがニココロ・ニコリ(Niccolò Niccoli)に宛てた『口さがない怠け者に対する弁論』(*Oratio in nebulonem maledicum*, 1424)において、自らを次のように描写している箇所から明らかである。

お前〔ニコリ〕が激しく批判している私の学びと読み書きにおける熟達は、それがどれほどのものであろうとも、現代の非常に学識深い人々、また、ローマの有力者に間違いなく気に入られた。そして彼らのおかげで私が遠くへ招聘され、名誉に浴し、彼らの仲間に入れてもらい、重要な業務を統べる立場につけられたことが知られている。さらに、私が非常に苦勞し努力して仕上げ発表し、広く普及している著作がある⁵⁾。

ブルーニは、まさに学識によって教皇庁に職を得て、同時に、その学識を執筆することで人々へ伝達していると述べている。彼によれば、文人は労をいとわず「共通の利便」(«communis utilitas»)、つまり公益に資することに努めるゆえ、「みなから」(«cunctis»)感謝されるのである⁶⁾。

「文人は公職を通じてのみならず、知的活動を通じても公益に資するため、

社会から感謝されるに値する」という認識は、人文主義者が理想とした古代の文人、とくに行動的生と観想的生のどちらをも極めたキケロにモデルが求められる⁷⁾。ただし、ここで疑問が生じる。キケロが知識層のみならず無学な大衆をも含めた社会全体を視野に入れていた一方⁸⁾、ブルーニは自らの知的活動を通じて公益を提供する対象として、誰を想定していたのであろうか。この点を、ブルーニが示す言語観に注目して確認してみよう。

15世紀初頭に執筆された『ピエトロ・パオロ・イストリアーノに捧げる対話』(*Dialogi ad Petrum Paulum Histrum*)に見られる過激な古典主義とは裏腹に、ブルーニは俗語作品も執筆している⁹⁾。このため、ニッコリのような徹底した古典主義者と比較して、彼は俗語の価値に一定の理解を示していたとみなされている¹⁰⁾。実際、ブルーニが俗語で執筆した公的性格を帯びる演説や書簡(正式な公文書は除外する)には、対外的なプロパガンダとしての機能と同時に、一般層に市民意識を教育する意図が指摘されている¹¹⁾。また、より学問的な性格を帯びる俗語作品として、新たな歴史意識に基づき理想的市民像を論じた『ダンテおよびペトラルカ伝』(*Vita di Dante e del Petrarca*, 1436)のほか、愛の力に理性で打ち勝つ人物を描いた『セレウコスとアンティオコス物語』(*Novella di Seleuco e Antioco*, 1437)、さらに、俗語詩3篇が確認されている¹²⁾。

以上から、たしかにブルーニは、俗語が対象読者を広げてくれるという利点を理解していたとみなされる。他方、学問的性格が強い作品群を見直してみると、彼が俗語の使用に対し、ある種の躊躇いを抱いていたことがうかがえる¹³⁾。なぜならブルーニが、俗語作品のうち最も人文主義的性格が強いとされている『ダンテおよびペトラルカ伝』において¹⁴⁾、「詩人」(poeta)という名称/名詞を論じる際、「こうした点は俗語で語ることが難しい」¹⁵⁾と、高度な学術的論題を扱ううえでの俗語の表現力に疑念を示しているからである。この躊躇を踏まえれば、彼が道徳哲学の入門書であるラテン語対話篇、『道徳学初歩』(*Isagogicon moralis discipline*, 1424-1426)を簡略化して俗語による『道徳詩』(*Canzone morale*, 1424?)を執筆し、また、本来ならば歴史書あ

るいは伝記として執筆されうる古代の逸話をボッカッチョに倣った俗語恋愛物語に仕立てあげた理由も了解される¹⁶⁾。こうした作品形式の選択は、ブルーニが俗語の表現力に十分な信頼を寄せていなかったことを指し示すと考えられるのである¹⁷⁾。

この躊躇いは、ブルーニが学術言語としてのラテン語に抱いていた信頼、また、そこから生じる知的エリート主義からも明らかである。1434年末から翌年にかけて、古代ローマにおいて使用されていた言語をめぐる論争が人文主義者間で生じた。この論争において、ブルーニの論敵であるビオンド・フラヴィオ (Biondo Flavio) は、古代ローマ人は洗練の度合いに差はあれ、大衆から知識人までみなラテン語を使用していたとの立場を採った。他方ブルーニは、ルネサンス期と同じく古代においても、知識人と大衆との間には使用言語の違いが存在したと主張している。彼はビオンドが持論の根拠として提示した点、つまり、古代ローマにおいて弁論家による演説や劇作の上演がラテン語で行われていたことについて、そもそも弁論家は「パン屋や剣闘士の教官などの大衆」(«pistores vero et lanistae et huismodi turba»)ではなく知識層に向けて演説を行っていたのであり、さらに、大衆は劇の「聴衆」(«auditores»)ではなく「観衆」(«spectatores»)にすぎなかったと反論している¹⁸⁾。なぜなら、ブルーニによれば、ラテン語は名詞の格変化や時制に応じた動詞の変化といった高度な文法性のため、ルネサンス期と同じく古代においても、知識層の専有物として熱心な学習を通じて習得される必要があったからである。この点を論じる際、ブルーニは「家政婦」(«mulierculæ»)や「乳母」(«nutrices»)、また、「学のない大衆」(«vulgus illitteratum»)を「我々文人」(«nos litterati»)と引き比べ、無学な人物と知識人との間に明確な区分を設定している¹⁹⁾。共和制フィレンツェを称賛するという公的業務から離れ、知識人同士の内輪で行われたこの論争から、文人としてのブルーニの本音が透けてくるのではないだろうか²⁰⁾。古代の大衆は、「現在、[大衆]がミサを理解できるほどにしか、弁論家の言葉を理解していなかった」²¹⁾とするブルーニの見解には、知識人としての自負、逆から言えば、大衆を侮る知的エリー

ト主義が観察されるのである²²⁾。

ブルーニの俗語観は、彼が抱くラテン語への信頼と自負を抜きにしては理解できない。学術言語としてのラテン語との比較から俗語の表現力への疑いが生じ、同時に、知的エリートとしての自負の裏返しとして大衆を侮る姿勢が確認されるからである。1430年、ブルーニはダンテの遺骸の返還を求めるラヴェンナ公宛での公式書簡を執筆している。その中で、ダンテの作品は「たいへんな知と教え、たいへんな多様性と豊かさにより、学のない者たちを楽しませ、非常に学識深く卓越した者たちを教育し、みなを正して指導することができる」²³⁾と述べている。ブルーニから見れば、学のない大衆はダンテの詩を楽しむだけで、その内容を深く理解することは不可能なのであろう。この文言に、上記の論争に確認されたものと共通する大衆蔑視の姿勢が観察される。大衆は、高度な学術言語はむろん、高度な学術的内容も理解できず、結局は学識と無縁の存在なのである。

ブルーニは俗語の公益性を認識しているが、その表現力には疑念を示している。彼が示す大衆蔑視の姿勢をも考慮すると、俗語をめぐるブルーニの関心は、それが帯びる公益性よりも、むしろ、この言語が知識人による使用に耐えうるのかどうかという点に集中していると思われる。結局、ブルーニが述べている「みな」とはラテン語の素養を持つ知識層であり、彼が誇る「公益性」は「文芸の国」(Respublica litteraria)の内部を向いていると判断される。以上を踏まえ、文人の公益性をめぐるアルベルティの姿勢を検討してみよう。

2. アルベルティが示す問題意識

アルベルティは文人としてのキャリアのはじめから、知識人と社会との関係を意識している。処女作である戯曲『フィロドクスス』において、アルゴス(用心深さ)とミネルヴァ(知)の息子であるギリシャの若者フィロドクスス(栄光を愛する者)は、ドキシア(栄光)と結ばれる。作者によれば、

この寓話は「熱心かつ熱意ある人物は、富んで豊かな人物に劣らず栄光を獲得できることを教えている」²⁴⁾が、知と美德を求めるこの若者がいかにして栄光を獲得できたのか、具体的には論じられていない。この点が、『食間対話集』所収の『宿命と運』(*Fatum et fortuna*, prima del 1439-1440)において、より明確にされている²⁵⁾。この作品では、人生という大河に翻弄される人類に学問という浮き板を与える知識人が描かれている。諸学問を発見した「神々しい存在」(«divi»)、また、そこに新たな発見を付け加え、失われた学問を回復した「神に近い存在」(«semidei»)である彼らは、人々に学識という援助を与えるため、感謝されるに値する²⁶⁾。

しかし、「学問に励めば社会から感謝される」というブルーニの認識と類似したこの理想像を、アルベルティは容易に達成できる目標としてみなしてはいない。『食間対話集』中、自伝的性格が強いとされている諸作品では、この図式が機能しないことが明らかにされている。たとえば、『孤児』(*Pupillus*, prima del 1432)において、はやくに父を亡くしたフィロポニウスは、「文芸による功績を通じ金持ちよりも立派になりたがる奴など憎まざるをえない」²⁷⁾と非難してくる親族に絶望している。同様の挫折は『花輪』(*Corolle*, 1442-1443)にも観察される。学識の価値を信じ美德を求めるレピドゥスは、「良き学芸の学びを通じて厚意を獲得しようとする、妬みを買ってしまう」²⁸⁾と嘆いている。さらに『指輪』(*Anuli*, 1432)において、熱心にミネルヴァに身を捧げてきたフィロポニウスは、「立派かつ幸せに人生を過ごすうえで君主にとっても私人にとってもたいそう役立つ」²⁹⁾自らの作品が、社会から認められないことに絶望している。

このように、ブルーニが示す楽観的な理想像とは真逆の状況を、アルベルティは繰り返し描き出している。しかし、彼はこうした状況を嘆くことに留まらず、文人と社会それぞれの行動原理を分析している。『作家』(*Scriptor*, 1439-1440)では、「私は小作品の執筆に没頭し、文芸／書物を通じていくらか名声を得ようと努力していた」³⁰⁾と述べるレピドゥスを、リブリペータが嘲笑している。リブリペータによれば、フィレンツェは「あらゆる種の無知

という霧ですっかり覆われ、活力すべてが野心と欲望の熱に奪われている」³¹⁾ため、レピドゥスの努力が評価されることはない。こうした社会の行動原理の一つが蓄財であることが、『死者』(Defunctus, prima del 1434)において示されている。死後、冥界で友人と再会し近況報告を行うネオフロヌスは、公益に資すると信じ熱心に執筆していた注釈書を、親族が高価な香油を遺産代わりに強奪する際の包み紙にしたことに絶望している³²⁾。そして『美德』(Virtus, prima del 1432)では、キケロら古代の知識人と共に語らっていた美德の女神が、武人に伴われた運の女神に襲われる。美德はユピテルに訴え出るが、この最高神も運を恐れており、とりなしてくれない。そのため美德は、自らが人間社会において軽視されるのではないかと危惧している³³⁾。

以上、『食間対話集』所収の諸作品が示すように、文人が自らの学びを通じて社会から価値を認めてもらおうと努めたところで、富に代表される「運に依存する事物」を最優先する社会は、文人および学識を評価しない。では、この現状を踏まえ、文人はどのように振る舞うべきであろうか。運に支配された社会が変容することは、おそらく期待できない。そのため文人は、1)「リブリペータのように、社会および文人の双方を嘲笑する」、あるいは、2)「現状打破を望むならば、文人が帯びうる公益性を検討し直す」という選択肢の間で、二者択一を迫られることになる。アルベルティは後者を選び、『文芸』を執筆している。

『文芸』序において、アルベルティは「勉学に励めば名誉を獲得できる」という認識を一蹴し³⁴⁾、文人は社会の行動原理である運に依存する諸善、すなわち、富、名誉、快楽を獲得できないと述べている³⁵⁾。彼は社会と文人がそれぞれ異なる価値観に従っていることを自覚したうえで³⁶⁾、単純化された既存の文人観の実効性に疑いの目を向けているのである。この点を踏まえ、同書第五章に注目してみよう。

『文芸』第五章では、文人が社会の最下層に置かれている状況が分析され、社会から見た文人像が描かれている。アルベルティはまず、金満家に語らせている。

実に、いったいどんな理由で、お前はあの文人を私よりも好むのか。〔……〕私がラテン語を知らないからといって、議会における私の意見と投票が、文人のそれよりも軽んじられるというのか。我々の祖国、魂は自由であり、我々が母国語で話すことは、無論、許されるべきである。そして、促されているにもかかわらず黙ってしまったなどと思われなないように、母国語を用いて自由に語ろうではないか。文人は書物の中で繊細な語彙を楽しむがよい。他方、我々金持ちは議会において我々の意見が通るように配慮しよう、私は知っているが、重厚な修辞を用いる誰かこのうえなく学識深い人物よりも、富という権威を用いる我々のほうが、より簡単にそうしたことをなしうるであろう。我々は黄金で飾られた意見を、彼らは月桂樹で飾られた意見を述べる。月桂樹は黄金に屈するがよい³⁷⁾。

文人とは異なる価値観に従う社会において、ラテン語に執着し、書物から学ばれた実用性に欠ける学識を誇る文人は必要とされない。続いてアルベルティは、大衆に文人を批判させている。

さらに、お前たち文人が公言する通りであるとしよう、お前たちは文芸を通じて万物について学識深くなればよい。だが、かくも豊かで神々しい贈り物が文芸に存しており、万物についてお前たちが知らないことなど何もないのであれば、人々のうち、お前たち文人以上に愚かな者は存在するであろうか。お前たちはどれだけ狂っているのか、貧困から抜け出すことを第一に学ばず、自らの貧しさと惨めさを嘆かないとは。したがって、お前たちが文芸を習得したことを我々は評価すべきであろうか、多くの場合、お前たちは知を示すのではなく、餓えて渴いているというのに。もし、ものを知っていると思われたいのなら、学んでくれ、学んでくれ、文人よ、困窮せずに暮らす術を。その後で、称賛されて生きることを望めばよい³⁸⁾。

大衆は、具体的かつ実用的である財産や富を評価する一方、抽象的で実用性に欠ける知や美德には価値を認めない³⁹⁾。学識が自らに公益性を与えてくれると勘違いしている文人は、文芸の国の価値観と社会のそれとを混同しているのである。

以上から、社会が文人に公益性を認めない理由が明らかである。文人はラテン語に固執し、抽象的で実用性に欠ける学識を誇るだけであるため、異なる原則に従い動く社会から、価値を認められない。ブルーニは知識人としての自負を抱きつつ、学術的に高度な言語および内容に固執していたが、アルベルティによれば、まさにこの姿勢自体が、文人および学識が公益性を獲得することを阻害しているのである。この点を踏まえ、『家族論』に目を移そう。

3. 『家族論』に観察される公益性

文人が自らの公益性の根拠とみなしている学識は、伝達の際の使用言語、また、その内容自体において、社会が評価するだけの実用性を有してはいない。そこで、可能なかぎり「みな」の役に立つ公益性を獲得するために、文人は学識の提示方法を再考しなければならない。アルベルティはこの点を意識しながら、『家族論』を執筆している。この作品は俗語で執筆されながらも、古典的対話篇という形式を採用し⁴⁰⁾、高度な哲学的内容を扱っている⁴¹⁾。登場人物は各々の知的背景、また、年齢に応じて作品内における役割と機能を与えられており⁴²⁾、彼らの配置により「学識」と「経験」とが対置されている。この対置を通じ作品全体において「学識の限界」が暴露され、古典の教えは経験的な知、あるいは現実的な視点から選択および調整されることになる⁴³⁾。以下では、まず、『家族論』が俗語で執筆されている理由を確認し、続いて、この作品において作者アルベルティがどのように学識を取り扱っているのかを検討してみよう。

『家族論』第三巻に付された序文（1435?）において、アルベルティはビオ

ンドとブルーニとの間の論争を念頭に置きながら「俗語の価値」を主張している⁴⁴。彼は古典ラテン語とトスカーナ語との連続性を踏まえ、古代における二言語併用というブルーニの見解を否定し、さらにそこから論点を変え、俗語には文法性が欠けているというブルーニの主張に反論している。その結果、トスカーナ語はラテン語と同様に高度な文法性を有するため、ラテン語と同じく高度な論題を扱うだけの表現力をもつことになる⁴⁵。そしてもし、この言語がまだ発展の途上にあるならば、それを磨くことは他でもなく文人の責務である。同時期に『トスカーナ語小文法』(*Grammaticetta*)が執筆されていることも含め⁴⁶、アルベルティが俗語の文法性、また、その表現力に寄せる信頼には、ブルーニが示したような躊躇いは観察されない。

くわえてアルベルティは、古典作家はできるかぎり多くの人々に作品を届けるために、みなが理解できる共通言語を用いて執筆したと述べている⁴⁷。そして自らの作品についても、「むしろ、思慮深い人物は私のことを称賛するであろう、もし私がみなに理解される仕方でも執筆し、少数の者たちに気に入られるよりも、まず多くの人々の役に立つことに努めたら」⁴⁸と、その公益性に言及している。実際、『レオン・バットιστα・アルベルティ伝』(*Leonis Baptistae de Albertis vita*, 1441?)によると、彼はラテン語に無知な親族のために『家族論』をトスカーナ語で執筆した⁴⁹。また、『家族論』全体の序文において、この作品を一族のいまだ十分な学識を持たない若者たちのために執筆したとも述べている⁵⁰。アルベルティは文芸の国の外部にも目を向けて、俗語による執筆を意識的に選択したのである。

アルベルティは公益性を意識して、『家族論』を俗語で執筆した。続いて、第三巻の主たる話者、「学識に欠けるが豊かな人生経験を誇る人物」として描かれているジャンノッツォに注目し、この作品において作者が高度な学術的内容をいかに処理しているのかを確認しよう。

アルベルティは作品第三巻の早い段階で、ジャンノッツォに「私は無学である」(*«io non so lettere»*)⁵¹と告白させ、彼を繰り返し文人と対置させている⁵²。無学な人物として設定されたジャンノッツォは、この巻の主題である

家政をめぐる諸問題への術学的なアプローチをことごとく拒絶している。たとえば、浪費家について論じる際、ジャンノッツォは論題にかかわる学術的な用語や定義にこだわらない姿勢を示している⁵³⁾。また、財産管理について論じる際、古典学識への無関心を示し⁵⁴⁾、時間の価値を論じる際には、学術的な議論よりも論題の本質にかかわる忠告を優先している⁵⁵⁾。そして、金銭が何を目的として生じたのかという疑問についても、学術的な分析を避けている⁵⁶⁾。アルベルティは徹底的に、ジャンノッツォを「文人というよりも実践的な人物」(«uomo più tosto pratico che litterato»)⁵⁷⁾として描写しているのである。

しかし、この人物が「無学であるという設定」を文字通りに受け取る必要はない。なぜなら、ジャンノッツォという登場人物は、古典を材源とした「モザイク」⁵⁸⁾として組み上げられているからである。作品第三巻序文において、アルベルティはクセノフォンを模倣し「飾らず平易な文体」⁵⁹⁾を採用したと述べているが、ジャンノッツォの人物像は、まさにクセノフォンの『家政論』において実践的教えを語るイスコマコスと対応している⁶⁰⁾。さらに、彼の台詞自体、たとえば、妻の教育をめぐる主張の材源も、クセノフォンの同作品に求められる⁶¹⁾。くわえて彼の主張には、アリストテレス『ニコマコス倫理学』との関係⁶²⁾、また、同時代の文人、ポッジョ・ブラッチョリーニ(Poggio Bracciolini)による『貪欲論』(*De avaritia*, 1428-1429)との関連も指摘されている⁶³⁾。

さて、学識を材源として組み上げた言説を、無学という設定の話者に語らせることで、アルベルティは何を狙ったのであろうか。まず、こうした話者は、作品の特徴として指摘されている「日常的な語りから哲学的内容への移行」⁶⁴⁾を容易なものとしてくれると同時に、「知識人による難解な語り口」⁶⁵⁾の対極である「飾らず平易な文体」にふさわしいと考えられる。さらにこの設定は、作者がジャンノッツォの口を借りて学識を提示する際に、あまりに微細で重箱の隅をつつくような議論に拘泥することなく、本質的かつ実用的な教えにのみ焦点を絞ることを可能にしているのではないだろうか。この点

を、作品第四巻におけるアドヴァルドの言葉から確認してみよう。

作品第三巻においてジャンノッツォが態度で示した姿勢を、第四巻において「人生経験豊かな文人」であるアドヴァルドが言語化してくれている。彼は、この巻の主題である友情にかんして「古典作家も私を満足させてくれなかった」⁶⁶⁾ため、「友情を詳述しそれを描き出すことではなく、友情を生み出し用いることについて私を賢くしてくれる誰か実践的な人物」⁶⁷⁾を求めている。アドヴァルドによれば、ときに術学的であり理想論に過ぎない古典学識は、多くの場合、現実に対応しきれず⁶⁸⁾、さらに場合によっては陳腐であり、むしろ経験を通じて体得される場合もある⁶⁹⁾。そのため、「[友情にかかわる] 教えは、黙して動かない書物からだけでは学ばれない。広場の真ん中、公的な集会や私的な集いにおける、別の種の訓練と明らかな経験が必要とされる」⁷⁰⁾。アドヴァルドは学識の限界を自覚しており、それが現実世界における実用性を獲得するためには、経験的かつ実践的な視点から吟味および選択され、補完されなければならないと理解しているのである。

さて、再びジャンノッツォに視線を戻すと、アドヴァルドの主張の根幹に存する「知は実用的でなければならない」という認識が、術学的アプローチをことごとく拒絶するこの人物にも共有されていることが明らかである。したがって、ジャンノッツォに与えられた「無学という設定」は、作者が彼の口を通して本質的かつ実用的な教えだけを提示するための、いわばフィルターとして機能していると考えられるのである。作品第四巻において、アドヴァルドは「大衆も文人も」(«al volgo e a' litterati») ⁷¹⁾満足させることのできる、社会全体に通用する賢人として称賛されている。この「学識の限界を自覚している」アドヴァルドと同じく、「無学という設定」のジャンノッツォにも、学識を絶対視することなく有用な教えだけを語る人物としての役割が託されているとみなされるであろう。『文芸』において社会から批判されている、抽象的で無益な学識を振りかざす文人とは異なり、彼らの言葉は現実的かつ実用的であるために、公益性を帯びることになる。

さらに、ジャンノッツォが態度で示しアドヴァルドが言語化している姿勢

は、作者アルベルティの思想と重なり合う。なぜなら、アルベルティはアドヴァルドの言葉をモザイクとして組み上げる際にも実用性を念頭に置き⁷²⁾、キケロ『友情について』を含めた諸材源の内容を取捨選択し⁷³⁾、場合によってそれらを改変あるいは否定しているからである⁷⁴⁾。結局、『家族論』において明示的あるいは非明示的に提案されている「学識および知識人のあるべき姿」を、作品執筆においてアルベルティは実践しているのである。

以上のように、『家族論』を執筆する際、アルベルティはジャンノッツォおよびアドヴァルドというフィルターを通すことで、玉石混交の学識から実用的な教をモザイクとして創出し、読者に提示している。実際、彼は『家族論』の教えについても、「私を批判する者は、いつでもいいから妬みを捨ててくれ、あるいは、自分が雄弁であると示せるような、より役立つ題材を論じてくれ⁷⁵⁾」と、その実用性に自負を示している。執筆の際の言語の選択、また、学識の処理の仕方のどちらの側面からも公益性を追求したこの作品は、『文芸』において示された社会からの批判に対するアルベルティからの回答となる。文人が帯びる公益性は、文芸の国の外部の住人をも含む「みな」の役に立つ学識の提示の仕方と深くかかわるのである。

終わりに

公益性を最大限に意識した提示の仕方を選択することで、『家族論』は既存の学問および文人の在り方に対しアルベルティが仕掛けた挑戦、翻って、まさにブルーニのような人文主義者に対する批判となった⁷⁶⁾。この作品により、アルベルティは文芸の国の外部に生きる人々に対して学識への門戸を広げることを試み、その内部に閉じこもる文人に対しては、学識の効果的な提示の仕方を実践してみせたのである。

俗語を用いて高度な学術的内容を扱うというアルベルティの試みは、1441年に開催された「俗語詩競技会」(Certame coronario)においてクライマックスを迎えるが⁷⁷⁾、その結末は彼の期待に反するものとなった。人文主義者

の多くはこの新たな挑戦に否定的であり、結局、俗語への不信感、また、そこから生じる知的エリート主義を示し続けたのである⁷⁸⁾。しかし、この挫折にもかかわらず、アルベルティは『家父長について』に至るまで、学識の実用性を追求し続けた。この姿勢の根幹に、「文人の公益性」にかんする意識が存することは明らかである。以上から、『家族論』以降の諸作品に指摘されているアルベルティの学問観と文人観は、『フィロドクスス』を皮切りとして、様々な作品において彼が検討および分析を重ね続けた問題意識から生じていると理解される。アルベルティは一貫して、文芸の国の外部にも目を向け続けたのである。

註

- 1) F. Furlan, «*Io uomo ingegnossissimo trovai nuove e non prima scritte amicizie*» (De familia, IV 1369-1370): *Ritorno sul libro de Amicitia*, in AA.VV., *Leon Battista Alberti (1404-72) tra scienze e lettere*. Atti del Convegno organizzato in collaborazione con la Société Internationale Leon Battista Alberti (Parigi) e l'Istituto Italiano per gli Studi Filosofici (Napoli) (Genova, 19-20 novembre 2004), a cura di A. Beniscelli e F. Furlan, Genova, Accademia Ligure di Scienze e Lettere, 2005, pp. 327-340, alle pp. 328-330.
- 2) 皮肉と揶揄に満ちた『食間対話集』や『文芸』などの作品群と、市民的人文主義を体现するとされる『家族論』に代表される作品群を対置させる二元的な見解は、E. Garin, *Rinascite e rivoluzioni. Movimenti culturali dal XIV al XVIII secolo*, Bari, Laterza, 2007 (1ª ed. 1975), p. 152; R. Cardini, *Alberti o della nascita dell'umorismo moderno*, in «*Schede umanistiche*», n.s., 1, 1993, pp. 31-85, a p. 31 等を参照。
- 3) H. Baron, *The Crisis of the Early Italian Renaissance*, Princeton, Princeton U.P., 1955, 2 voll. パロンによる提案の受容と変容は、J. Hankins, *The "Baron Thesis" after Forty Years and Some Recent Studies of Leonardo Bruni*, in «*Journal of the History of Ideas*», 56 (2), 1995, pp. 309-338 を参照。
- 4) ブルーニの人物像は、L. Martines, *The Social World of the Florentine Humanists: 1390-1460*, Princeton, Princeton U.P., 1963, pp. 117-123 e 165-176; A. Field, *The Intellectual Struggle for Florence. Humanists and the Beginnings of the Medici Regime, 1420-1440*, Oxford, Oxford U.P., 2017, pp. 127-186 を参照。
- 5) L. Bruni, *Oratio in nebulonem maledicum*, in Id., *Opere letterarie e politiche*, a cura di P. Viti, Torino, UTET, 1996, pp. 338-371, a p. 354: «*Mea quidem studia, que tu tantopere spernis, atque hanc litterarum peritiam, qualiscumque est, et doctissimis hominibus etatis nostre et romanis principibus placuisse video, eorumque gratia me ultro evocatum, in honore habitum, in intimas eorum*

familiaritates admissum, magnis rebus gerendis prefectum constat. Et extant sane opera, magnis laboribus meis vigiliisque confecta, que a me edita circumferuntur».

- 6) Ibid., p. 348. 文人による知的活動が公益性を帯びるとする主張は、L. Bruni, *Humanistisch-Philosophische Schriften. Mit einer Chronologie seiner Werke und Briefe*, hrsg. von H. Baron, Wiesbaden, M. Sändig, 1969 (ed.orig. Leipzig-Berlin, B.G. Teubner, 1928), p. 75; Id., *Epistolarum libri VIII. Recensente Laurentio Mebus (1741)*, a cura di J. Hankins, Roma, Storia e Letteratura, 2007, 2 voll., vol. II, p. 81; Ibid., vol. II, p. 198 等を参照。
- 7) L. Bruni, *Vita Ciceronis*, in Id., *Opere letterarie e politiche*, cit., pp. 416-499, a p. 468.
- 8) たとえば、Cic. *Brut.*, 186 e 188; Cic. *Orator*, 48, 160 など。
- 9) ブルーニによる俗語の使用については、J. Hankins, *Humanism in Vernacular: The Case of Leonardo Bruni*, in *Humanism and Creativity in the Renaissance. Essays in Honor of Ronald G. Witt*, ed. by C.S. Celenza and K. Gouwens, Leiden-Boston, Brill, 2006, pp. 11-29 を参照。
- 10) A. Mazzocco, *Linguistic Theories in Dante and the Humanists. Studies of Language and Intellectual History in Late Medieval and Early Renaissance Italy*, Leiden-New York-Köln, E.J. Brill, 1993, pp. 30-38; G. Tanturli, *Il disprezzo per Dante dal Petrarca al Bruni*, in «Rinascimento», 25, 1985, pp. 199-219, alle pp. 215-216; Hankins, *Humanism in Vernacular*, cit., p. 13.
- 11) Ibid., pp. 14-15.
- 12) Ibid., p. 25.
- 13) Mazzocco, op.cit., p. 91; S. Gilson, *Dante and Renaissance Florence*, Cambridge, Cambridge U.P., 2005, p. 125.
- 14) この作品の学問性については、Ibid., pp. 114-121; G.J. Ianziti, *Writing History in Renaissance Italy. Leonardo Bruni and the Use of the Past*, Cambridge-London, Harvard U.P., 2012, pp. 169-185; S.U. Baldassarri, *Bruni Danista. II: L'epistola sull'origine di Mantova e le "Vite di Dante e Petrarca"*, in «Italian Quarterly», 52, 2015, pp. 1-23, alle pp. 5-11 を参照。
- 15) L. Bruni, *Vita di Dante e del Petrarca*, in Id., *Opere letterarie e politiche*, cit., pp. 537-560, a p. 549: «Con tutto che queste sono cose che male si possono dire in vulgare idioma».
- 16) Cfr. E. Santini, *La produzione volgare di Leonardo Bruni Aretino e il suo culto per "le tre corone fiorentine"*, in «Giornale storico della letteratura italiana», 60, 1912, pp. 289-339, a p. 331.
- 17) M. Tavoni, *Latino, grammatica, volgare. Storia di una questione umanistica*, Padova, Antenore, 1984, pp. 43-56; Id., *Storia della lingua italiana. Il Quattrocento*, Bologna, Mulino, 1992, p. 62; Mazzocco, op.cit., pp. 216-217, n. 20; Gilson, op.cit., p. 122; Baldassarri, art.cit., p. 10. 他方、Ianziti, op.cit., pp. 175-176 は、ブルーニが俗語の表現力に疑いを抱いていたとしつつ、「詩人」の解説をうまくこなしている点に注目している。ブルーニの俗語観および俗語作品が帯びる政治性については、Gilson, op.cit., pp. 114 e 123; Baldassarri, art.cit., p. 6; Field, op.cit., pp. 127-186 を参照。
- 18) G. Marcello-G. Ammannati, *Il latino e il volgare nell'antica Roma. Biondo Flavio, Leonardo Bruni e la disputa umanistica sulla lingua degli antichi Romani*, Pisa, Edizioni della Normale, 2015, p. 240.
- 19) Ibid., pp. 244 e 246. Cfr. Tavoni, *Latino*, cit., p. 46; R. Fubini, *Umanesimo e la secolarizzazione da Petrarca a Valla*, Roma, Bulzoni, 1990, p. 30, n. 69; C.S. Celenza, *End Game: Humanist Latin in*

- the Late Fifteenth Century*, in AA.VV., *Latinitas Perennis. Vol. II: Appropriation and Latin Literature*, ed. by Y. Maes, J. Papy and W. Verbaal, Leiden-Boston, Brill, 2009, pp. 201-242, a p. 219.
- 20) Cfr. Tavoni, *Latino*, cit., pp. 46-47.
- 21) Marcello-Ammannati, op.cit., p. 240: «intelligebant oratoris verba ut nunc intelligunt Missarum solemniam».
- 22) Cfr. ibid., p. 20.
- 23) P. Viti, *Leonardo Bruni e Firenze. Studi sulle lettere pubbliche e private*, Roma, Bulzoni, 1992, p. 79: «tanta sapientia et doctrina tantaque varietate et copia ut et indoctos delectare et doctissimos prestantissimosque homines docere et universos dirigere ac instruere possint».
- 24) L.B. Alberti, *La favola di Philodoxus (Philodoxeos fabula)*, a cura di A.G. Cassani, prefazione di C. Angelino, Genova, Ramo, 2013, p. 40: «docet enim studiosum atque industrium hominem non minus quam divitem et fortunatum posse gloriam adipisci».
- 25) 以下、『食間対話集』所収の諸作品の執筆年代は、R. Cardini, *Introduzione* a L.B. Alberti, *Intercenales. Editio minor*, a cura di R. Cardini, Firenze, Polistampa, 2022, 2 tt., t. I, pp. VII-XXVIII, a p. XX による推定に従う。
- 26) Alberti, *Intercenales*, cit., t. 1, p. 26 (56-59).
- 27) Ibid., t. I, p. 6 (10): «non esse non odiosum eum, qui sese ob meritum litterarum ditioribus preferri cuperet».
- 28) Ibid., t. I, p. 132 (69): «si studiis bonarum artium gratiam sector, invidia rependitur».
- 29) Ibid., t. I, p. 478 (42): «in maiorem modum valere ad vitam cum principum tum et privatorum degendam bene ac beate».
- 30) Ibid., t. I, p. 4 (2): «Ego quidem apud meos libellos occupatus enitebar aliquam de me famam proseminare litteris».
- 31) Ibid., t. I, p. 4 (3): «qui quidem tam undique opertus est caligine omnis ignorantie, cuius et omnis humor est penitus absumptus estu ambitionum et cupiditatum».
- 32) Ibid., t. I, pp. 432-440.
- 33) Ibid., t. I, pp. 16-18 (19-22).
- 34) Id., *De commodis litterarum atque incommodis*, a cura di M. Regoliosi, Firenze, Polistampa, 2021, 2tt., t. I, p. 196 (II, 6-8).
- 35) Ibid., t. I, p. 198 (II, 22-23).
- 36) アルベルティは社会の行動原理自体を否定してはいない。たとえば、ibid., t. I, pp. 216-217 (IV, 68-73) において、蓄財に適した職業として軍務、商業、農業が称揚されている。
- 37) Ibid., t. I, pp. 234- 235 (V, 26-30): «Enimvero, qua de causa illum mihi litteratum prefers? [...] An vero in senatu, quia grammaticen nesciam, sententia et vota minus nostra quam litterati valebunt? Libera nobis est civitas, liber animus, liceat sane nostra materna inter nos lingua loqui, atque ea quidem sic loquamur libere ut inviti tacuisse nihil videamur. Gaudeat iste sane litteratus, inter libros, suis exquisitis vocabulis, nos autem divites curemus ut apud senatum nostra in primis sententia vigeat, quod, scio, pulchrius nos quam quivis litteratissimus suis preponderatis exercitationi-

bus nostra divitiarum auctoritate assequemur. Nos enim deauratas, illi laureatas sententias proferrunt, et cedat auro laurus».

- 38) Ibid., t. I, p. 238 (V, 64-67): «Tum preterea sit sane illud [...] ut predicatis: este litteris docti rerum omnium; hoc si vestris litteris tam amplissimum atque divinum munus inest, ut nihil rerum omnium sit quod ignoretis, quid est vobis litteratis in hominum genere stultius? Quanta vestra insaniam est, dum non in primis discitis esse non egeni, dumque vos paupertatis et miserie vestre non peniteat? Utrum igitur tanti faciemus istuc ipsum didicisse litteras, ubi pluries detur sitire et exurire, quam sapientiam ostentare? Discite, discite litterati (si aliquid sapere videri cupitis) primo sine inopia vivere, postremo optabitis cum laude vivere!».
- 39) Ibid., t. I, p. 237 (V, 55-56).
- 40) F. Tateo, *Tradizione e realtà nell'Umanesimo italiano*, Bari, Dedalo, 1974, p. 280; D. Marsh, *The Quattrocento Dialogues. Classical Tradition and Humanist Innovation*, Cambridge-London, Harvard U.P., 1980, pp. 81-86.
- 41) M. Danzi, *Governo della casa e scientia oeconomica in Italia fra Medioevo e Rinascimento. Nota sulla Famiglia di L.B. Alberti*, in AA.VV., *Leon Battista Alberti*. Actes du congrès international (Paris, 10-15 avril 1995), a cura di F. Furlan et al., Paris, Vrin, 2000, 2 voll., vol. I, pp. 151-170.
- 42) F. Furlan, *Progression du dialogue et production de la vérité dans le De familia*, in Id., *Studia albertiana. Lectures et lecteurs de L.B. Alberti*, Torino-Paris, Nino Aragno-Vrin, 2003, pp. 115-153, alle pp. 138-153.
- 43) Marsh, op.cit., p. 89; Furlan, *Progression*, cit., p. 136.
- 44) Cfr. Tavoni, *Latino*, cit., pp. 49-52; Mazzocco, op.cit., pp. 82-85; G. Patota, *Introduzione a L.B. Alberti, Grammatichetta e altri scritti sul volgare*, a cura di G. Patota, Roma, Salerno, 1996, pp. XI-V-XIX.
- 45) Cfr. Id., *Lingua e linguistica in Leon Battista Alberti*, Roma, Bulzoni, 1999, p. 56; Gilson, op.cit., p. 127.
- 46) Patota, *Introduzione*, cit., p. XXXVII は、この作品がブルーニに対する反論であるとしている。
- 47) L.B. Alberti, *I libri della famiglia*, a cura di R. Romano e A. Tenenti. Nuova edizione a cura di F. Furlan, Torino, Einaudi, 1994, pp. 189-190 (64-71).
- 48) Ibid., p. 190 (76-78): «Più tosto forse e' prudenti mi loderanno s'io, scrivendo in modo che ciascuno m'intenda, prima cerco giovare a molti che piacere a pochi».
- 49) R. Fubini-A. Menci Gallorini, *L'autobiografia di Leon Battista Alberti. Studio e edizione*, in «Rinascimento», II s., 12, 1972, pp. 21-78, a p. 70.
- 50) Alberti, *I libri della famiglia*, cit., p. 13 (294-298).
- 51) Ibid., p. 201 (259).
- 52) Ibid., pp. 201-202 (259-271), p. 224 (906-908), p. 236 (1271-1273), p. 262 (2042-2048), pp. 299-300 (3171-3179) e pp. 300-301 (3201- 3204).
- 53) Ibid., p. 199 (192-195).
- 54) Ibid., p. 204 (333-335).

- 55) Ibid., p. 217 (728-731).
- 56) Ibid., p. 306 (3354-3356).
- 57) Ibid., p. 236 (1271-1272).
- 58) アルベルティの創作手法である「モザイク」については、R. Cardini, *Mosaici. Il «nemico» dell'Alberti*, Roma, Bulzoni, 2004 を参照。
- 59) Alberti, *I libri della famiglia*, cit., p. 191 (120-121): «lo stile suo nudo, semplice». A.M. Cabrini, *Alberti e Senofonte*, in AA.VV., *Alberti e la tradizione. Per lo "smontaggio" dei "mosaici" albertiani*. Atti del Convegno internazionale del Comitato Nazionale VI centenario della nascita di Leon Battista Alberti (Arezzo, 23-24-25 settembre 2004), a cura di R. Cardini e M. Regoliosi, Firenze, Polistampa, 2007, 2 tt., t. I, pp. 21-46, alle pp. 37-38 によれば、アリストテレスを好むブルーニを意識して、アルベルティはクセノフォンを模倣している。
- 60) L.B. Alberti, *I primi tre libri della famiglia*, testo e commento a cura di F.C. Pellegrini, riveduti da R. Spongano, Firenze, Sansoni, 1946, p. 247; Marsh, op.cit., p. 81; Furlan, *Progression*, cit., p. 148.
- 61) Alberti, *I primi tre libri della famiglia*, cit. にベツレグリーニがつけた諸註を参照。Cfr. anche Cabrini, art.cit., alle pp. 37-46.
- 62) M. Danzi, «*In bene et utile della famiglia*»: *appunti sulla precettistica albertiana del governo domestico e la sua tradizione*, in *Leon Battista Alberti e il Quattrocento. Studi in onore di Cecil Grayson e Ernst Gombrich*. Atti del Convegno internazionale (Mantova, 29-31 ottobre 1998), a cura di L. Chiavoni, G. Ferlisi e M.V. Grassi, Firenze, Olschki, 2000, pp. 107-140, a p. 120; Cabrini, art.cit., p. 43.
- 63) Danzi, «*In bene et utile della famiglia*», cit., pp. 121-122.
- 64) Ibid., pp. 110-114.
- 65) Cfr. Alberti, *I libri della famiglia*, cit., p. 102 (32-35).
- 66) Ibid., p. 349 (742-743): «né degli antichi ancora scrittori alcuno apieno mi satisfecce».
- 67) Ibid., p. 352 (819-821): «pratico alcuno uomo, da cui io sia più in fabricarmi e usufruttarmi l'amizie, che in descriverne e quasi disegnarle fatto ben dotto».
- 68) Ibid., p. 351 (796-823).
- 69) Ibid., p. 354 (849-873).
- 70) Ibid., p. 354 (873-876): «Né puossi bene averne dottrina solo dai libri muti e oziosi. Conviensi in mezzo alle piazze, entro a' teatri e fra e' privati ridutti averne altra essercitazione e manifesta esperienza».
- 71) Ibid., p. 374 (1380).
- 72) M. Danzi, *Fra 'oikos' e 'polis': sul pensiero familiare di Leon Battista Alberti*, in *La memoria e la città. Scritture storiche tra Medioevo ed Età moderna*, a cura di C. Bastia e M. Bolognani, Bologna, Il Nove, 1995, pp. 47-62, a p. 52; M. Regoliosi, *Montaggio di testi nella Famiglia*, in *Alberti e la tradizione*, cit., t. I, pp. 211-240, a p. 215; C. Marsico, *Per un mosaico albertiano: Le "tessere" del Lælius nel libro IV De familia (o della trasformazione dei significati)*, in «*Albertiana*», 15, 2012, pp. 169-192, a p. 170.
- 73) Regoliosi, art.cit., pp. 216-228.
- 74) Marsico, art.cit., p. 173.

- 75) Alberti, *I libri della famiglia*, cit., p. 191 (99-101): «piaccia quando che sia a chi mi biasima o deponer l'invidia o pigliar più utile materia in qual sé demonstrino eloquenti».
- 76) Furlan, *Io uomo ingegnosissimo*, cit., p. 340.
- 77) この競技会の眼目は、古典詩を韻律を含め俗語で模倣することである。Cfr. G. Gorni, *Storia del Certame coronario*, in Id., *Leon Battista Alberti. Poeta, artista, camaleonte*, Roma, Storia e Letteratura, 2012, pp. 4-43.
- 78) Gilson, op.cit., pp. 130-131.